

土門 剛

土門 剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）など。会員制メールマガジン「アグロマネーニュース」も発行している。

水田活用問題のようなハードなテーマを扱うと、なぜかその翌月は脱力感が残る。取材と執筆に全力投球した後遺症（笑）かもしれない。今月は、息抜きの話題にした。大好きなヨーロッパ旅行記のようなものを取り上げてみる。

半世紀前

初めてのヨーロッパ旅行

初めてヨーロッパに旅したのは、学生時代の1969年のことだから半世紀以上前のこと。AI ESEC（アイセック、国際経済商学学生協会）主催の海外インターンシップに参加するためだった。航空運賃は鮮明に覚えている。

7月のハイシーズン出発の往復で19万8000円、燃油・サーチャージはまだなかった。

当時、男子大卒初任給（月額）は3万1200円。いまの貨幣価値に換算すると、21年度大卒初任給が22万5400円なので、6.3倍分、100万円以上の航空運賃ということなる。旅行費用は、2年ぐらいアルバイトで稼いで捻出した。

羽田空港からの搭乗機は、日本航空ダグラスDC-8だった。当

時、日本からヨーロッパに向かうには北極圏ルートを飛行する。米ソ冷戦時代が続いていたので、旧ソ連がシベリア上空を開放していなかったからだ。後で知ったことだが、コクピットにはサバイバル銃が常備されていたという。ハイジャック対策ではなく不時着に備えてものだった。不時着すればホッキョクグマに乗客が襲われるリスクに備えてのものだ。

搭乗機は、給油のため米国アンカレッジ空港でストップ・オーバーする。すでにそのころ空港内には日本人乗客目当ての立ち食いのうどん屋が大型免税店の一面にあった。経営者は韓国の方だった。値段も覚えている。1杯10ドルもした。1ドル360円なので3600円。ぼったくりに近い。貧乏旅行の身には手が出る金額ではなかった。

当時、ドイツのゲートウェイ空港は、北部のハンブルグ空港だった。ヨーロッパ屈指の商業港があるので日本から多くの企業が拠点を置いていた。その関係で利用客

が多かったようだ。フランクフルト空港は、国際的なハブ空港を目指して大がかりな空港整備の最中で、ゲートウェイ空港になるのは、新しいターミナルが完成した1972年のことだった。

インターシップは、大手化学品メーカー「AGFA」（アグファ社）と決まっていた。ところが、レバークーゼンの本社を訪れ、簡単な面接を受けて、その場でクビになってしまった。肝心のドイツ語が、研修に必要なレベルに達していないことが理由だった。現地AIESECが、代わりに見つけてくれた研修先が、ドイツ西部のケルンという町の銀行だった。そこで銀行員の真似事をやる羽目になった。

変動相場制の洗礼を受け ドイツ・トレードもどき

シュパルカッセ・デア・シユタット・ケルン、ケルン市貯蓄銀行。ケルン市が運営する庶民の金融機関だ。日本なら東京都の石原慎太郎元知事が設立した新銀行東京といったところ。数年前、元職場を訪れたときには、隣のボンにある貯蓄銀行と合併してケルン・ボン貯蓄銀行という名称になっていた

EU内の地域文化が示す存在感 またまたヨーロッパの旅へ

た。競争相手は、庶民相手ということで信用協同組合やポストバンク（郵便貯金）などだ。

配属されたのは、ケルンのランドマーク、世界最大のゴシック建築として知られるケルン大聖堂近くの支店。その外国為替カウンタ―だ。

大聖堂には世界各国から観光客がやってくる。観光客のための両替が仕事だった。米国と英国のツ―リストが、ドルやポンドなどを旧西ドイツマルク（以下、マルク）に交換してくれとやってくるのだ。この支店に配属してくれたのは、ドイツ語を使わなくても仕事ができるという配慮だった。

たいしたことでもできなかったが、この職場での最大の経験は、今では当たり前の変動相場制の洗礼を受けたことだ。日本が1ドル360円の固定相場を捨てるのは、その4年後のことになる。

当時はフラン危機の最中だった。ドイツに比べて経済力に劣るフランスの通貨フランが、投機筋から狙い撃ちにされていた。あるとき、支店長に「なぜフランが下落、マルクが値上がりするのか」と質問してみたことがあった。支店長氏の回答は実にシンプル。「フ

ランス人の金持ちがマルクを買うから」。

正直、これを理解するのに相当時間がかかった。ただすぐに反応したことがある。「何を参考にすれば、フランやマルクの動きを理解できるか」と質問。支店長は「駅にヘラルド・トリビュンという英字紙がある。それを読めば、ヒントがつかめる」とアドバイスしてくれた。

ヘラルド・トリビュン（通称ヘラトリ）は、ワシントン・ポストとニューヨーク・タイムズが折半出資してパリで発行。世界各地で発売されていた。宅配はなく中央駅で売られていた。当時は、経済情報を手に入れるには、ヘラトリしかなかった。

日本から持ってきた50万円ほどの滞在費用で小遣い銭稼ぎを思いついた。マルクが下がったときにマルクを買い、上がったときに売るというデイ・トレードに近い運用だ。2カ月ほどで100マルクぐらいは鞘を抜くことができた。1マルク70円の時代だった。

無事、ケルンでの3カ月間の研修を終えることができた。後期の授業をすっばかしてヨーロッパ各地を巡ってきた。以降、春と秋に

ヨーロッパへ出かけるのが、ルーティンとなってしまう。60回近くになるうか。

文化の交差する地に魅了されて

ヨーロッパに魅了された理由は簡単には語れないが、文化、歴史、食べ物、飲み物、そして人か。

大好きなスポーツは、その文化が交差するところだ。ゲルマンとラテン、ゲルマンとスラブ、スラブとラテン、それぞれの文化が交差するところに、歴史があり、食べ物や飲み物も品が変わり、魅力的な人との出会いも多くなる。とくにゲルマン文化とラテン文化の交差する場所にはよく出かけた。

文化の交差、わかりやすく説明するなら、博多名物の明太子だ。朝鮮半島に暮らしていた日本人が終戦後帰国して、韓国で食べていた「たらこ」のキムチを日本人の口に合うように塩たらこ唐辛子の入った調味料で漬け込んで作り始めたのが今の日本の明太子の始まり。老舗のやまやホームページにそう書いてある。

風景にも文化の交差がある。そう感じたのは、南チロル地方を旅したときだ。チロルは、オースト

リア西部で、北はドイツ、西はスイス、南はイタリアに接する。中心都市はインスブルック。そこからアルプスを越えた南はイタリアのアルト・アディジェ州になる。ここは第一次世界大戦までハプスブルグ帝国の版図だった。イタリアに入ってすぐの大きな町は、ボルツァーノ。駅名はドイツ語でボーツェンとも表示されている。

そのボルツァーノから州都トレントへ向かう途中のサロルノ（ドイツ語表記ザルルン）で農村風景が一変する。南チロルの南限で、それを示すのが言語の境界線である。北がドイツ語で南がイタリア語を話す。

北側のドイツ系が住む地域は、農家が1軒1軒離れた散居の形態をとり、農地も広い。これに対し、南側のイタリア系が住む地域は、農家が密集して建ちアパートメント形式で、農地も細分化され面積も狭い。住居の壁の色にも違いがある。北側は白く、南側はいかにもイタリアらしい暖色系の色だ。ここをドライブしたことがある。参考にしたのは、講談社現代新書『ハプスブルグ帝国を旅する』（加賀美雅弘）だ。農村景観の違いはこう説明されている。

土門 辛聞

サービスの自由
移動を実現する
ことで、「欧州
をひとつのまと
まった地域とす

こととして欧州連合（EU）が発
足して30年目。人、モノ、資本、

グローバリゼーション への反作用か

一方、イタリア系の住民の間には均分相続法が浸透している。農地は相続とともに、住宅には複数の世帯が居住するようになった。玄関の表札には、同じ性を持つ世帯が並ぶ。中庭に向かって、こちらの窓は叔父夫婦、あちらは姪の新居という具合だ。言語の境界線を越えようと、この違いがあまりに明瞭なのに驚かされる」

「その理由の一つは、相続法の違いだと言われる。この地域ではドイツ系住民は一子相続を慣習とし、農地や家屋は分割せずに相続されてきた。それはしばしば200年以上にわたって継続され、旧家として高く評価される格付けの基準ともされてきた。ドイツ系の農家を訪ねると、州政府による永年世襲農家の認定証が誇らしげに飾られているのによく見る。

「それが目的だった。シングル・マーケット（単一市場）の実現だ。これに併せて単一通貨（ユーロ）も導入。シェンゲン協定で国境も取り払われた。遠い日本から傍観していたら、単一市場や単一通貨は各地域の文化を融合してしまうのかなと危惧していたら、単なる杞憂に過ぎなかった。以前よりも増して地域の文化がEU域内での競争という形で存在感を示し始めたからだ。

EUも、その動きを後押ししている。1958年に締結した「原産地名称の保護および国際登録に関する協定」（リスボン協定）、次いで同協定を2015年に改定し、GIマークの地理的表示制度も保護の対象としたことだ。GI制度とも呼ぶ。農水省輸出・国際局の説明を借用しておこう。

「その地域ならではの自然的、人文的、社会的な要因・環境の中で長年育まれてきた品質、社会的評価等の特性を有する産品の名称を、地域の知的財産として保護」

日本でも2016年から保護が始まり、第1号は「あおもりカシス」が登録された。小さな食用の果実をつけるベリーの一種、黒スグリのことだ。昨年10月現在で1

22産品が登録されているが、フランスやイタリアなど先発国と比べるとまだ少ない。登録産品の海外での認知度も低いという印象を禁じ得ない。

EU域内でGI登録を受けた農産品・同加工品は、国内消費と域内輸出が、それぞれ4割ずつ。残り2割が域外輸出という割合。域外輸出がもっと多いと思っていたが、そうではなかった。

その理由は何だろうかと考えてみた。とっさに思いついたのは、グローバリゼーションの反作用ということだ。経済が地球規模で拡がりを持つと、逆に地域がアイデンティティー（主体性）を失わずに存立しようとする求心力が働くのではないだろうか。

GIと農家民泊を イタリアで学び直したい

ドル円相場で一時150円台をつけた為替相場は、円高方向に戻し、現在は小康状態を保っているが、4月の日本銀行総裁人事が落ち着けば、再び円安方向に振れていく可能性が高い。本コラム1月号でも指摘したように、農村、輸入、インバウンドのキーワードが象徴するような時代が到来するだ

ろう。

この春、久しぶりにイタリアを旅してみたい心境に駆られている。GIなどをツールに農産品の輸出を増やし、なおかつ農村が舞台のアグリツーリズモ（農家民泊）でインバウンド客を伸ばした成功例を学び直してみたい。

行き先は、日本のGIで初めての海外産品となった生ハム「プロシュット・ディ・パルマ」の産地、エミリア・ロマーニャのパルマになるか。

この地域には、発酵を伴う農産品のGI登録が多い。パルマ近郊ジベッロの「クラテツロ（生ハム）」、モデナの「アチエート・パルサミコ（酢）」、エミリア・ロマーニャ州などの「パルメジャーノ・レッジャーノ（チーズ）」など地域の代表選手が目白押しだ。

GIは、インバウンドの強力な援軍となる。ツーリストが関心を抱く5つのGをご存知だろうか。観光が成り立つ5つの条件という解釈でもよい。筆者オリジナルで、

GREEN（自然）
GOURMET（料理）
GAMBLE（カジノか）
GENTLENESS（旅先の人情）
さて最後のGは？